

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
1 1972年1月1日	<p>経済学基礎理論研究所編『現代日本経済入門』汐文社</p> <p>第1部 ドル危機と日本経済</p> <p>第1章 アメリカによる富の独占</p> <p>第2章 アメリカ独占体による金準備の独占とIMF体制</p> <p>第3章 軍事力の独占とドル危機</p> <p>第4章 ドル防衛政策の展開</p> <p>第5章 ドル防衛政策の破綻と円の切り上げ圧力</p> <p>第6章 ニクソンの新経済政策と通貨調整</p> <p>第7章 変動相場制と米日独占の利益</p> <p>第8章 ロジャーズの要求と沖縄、中国問題</p> <p>第9章 沖縄協定と「肩がわり」問題</p> <p>第2部 日本経済の基本構造と発展の方向</p> <p>第10章 戦後日本資本主義の構造的特質について</p> <p>第11章 「円切上げ」「自由化」「肩がわり」と日本経済</p> <p>第12章 低賃金維持政策としての労働力流動化政策</p> <p>第13章 アメリカと日本における軍国主義への傾向と軍国主義滅亡の法則</p> <p>第14章 民主主義的統制の力</p> <p>第15章 日本経済の民主主義的変革—その日本報告</p> <p>第16章 日本の政治経済情勢と国民の生活を守るたかひの方向</p> <p>第17章 世界景気の動向と日本経済の「選択」</p> <p>文献解題・戦後日本資本主義発達史年表・資料</p> <p>共同執筆者代表:池上惇、企画:池上惇・中村雅秀・梅垣邦胤</p> <p>協力:中谷武雄・松永健二・山地靖弘・近藤文男・柳ヶ瀬孝三・森岡孝二・佐々木松一・重森暁・坂井昭夫・湯浅良雄</p> <p>※経済学基礎理論研究所(旧名称)名での初出本</p> <p>※「あとがき」に経済学基礎理論研究所理事長代行重森暁名で、研究所の成り立ち・運動原則が書かれている</p>
2 1973年6月1日	<p>池上惇編著『現代世界恐慌と資本輸出』青木書店</p> <p>まえがき [池上惇]</p> <p>I 現代世界恐慌と国際通貨危機</p> <p>1 資本主義体制の危機と産業循環 [うち第1節は池上惇]</p> <p>2 現代世界恐慌と資本輸出—理論的概括 [うち第1節は吉川達、第2節は共同執筆]</p> <p>3 社会資本投資による恐慌克服策の意義と限界 [共同執筆]</p> <p>II アメリカ世界企業と現代の恐慌</p> <p>1 世界企業と現代恐慌の国際的メカニズム [森岡孝二]</p> <p>2 世界企業とヨーロッパ共同体 [森岡孝二・坂井昭夫・小野秀生]</p> <p>3 低開発国にたいする資本輸出の基本戦略</p> <p>4 アメリカの東西貿易政策と世界企業</p> <p>5 アメリカの国際収支分析—世界企業の発展と国際収支の構造変化を中心に [第1節は池上惇、第2節は坂井昭夫]</p> <p>III 国際通貨調整下の日本資本主義</p> <p>1 国際収支からみた日米関係 [重森暁]</p> <p>2 アメリカの対日直接投資と米—日—東南アジア系列化過程 [柳ヶ瀬孝三]</p> <p>3 国際分業再編成の財政政策—「肩代り」財政と「社会資本投資」財政</p> <p>IV 現代資本輸出と「新しい従属」の問題</p> <p>1 「新しい従属」の展開過程</p> <p>2 世界企業と国家主権</p> <p>あとがき [坂井昭夫]</p> <p>執筆者:池上惇、芦田亘、梅垣邦胤、小野秀生、坂井昭夫、重森暁、成瀬龍夫、森岡孝二、柳ヶ瀬孝三、吉川達</p> <p>※経済学基礎理論研究所編集委員会「現代世界恐慌と資本輸出」プロジェクトの研究結果</p> <p>※「まえがき」に経済学基礎理論研究所の共同研究による第二作目であることが記載されている</p> <p>※奥付に執筆者紹介が記載されているが、執筆担当箇所は上記の一部の初出論文明記と執筆者記載を除き、明記されていない</p>
3 1975年1月15日	<p>池上惇・坂井昭夫・林堅太郎編著『現代日本資本主義の政治経済機構』労働経済社</p> <p>序にかえて—日本資本主義の諸指標 [坂井昭夫]</p> <p>第1章 日本の国家独占資本主義をどうつかむか(政府・銀行・産業と技術) [池上惇]</p> <p>第2章 日本国家独占資本主義の国際的地位と低賃金構造の再編成 [池上惇]</p> <p>第3章 日米軍事同盟と日本の軍事費 [坂井昭夫]</p> <p>第4章 国際分業再編成下における独占資本の蓄積と独占禁止政策 [小野秀生]</p> <p>第5章 「産業構造改革」論と日本資本主義(外資と技術・資源・国家) [林堅太郎]</p> <p>第6章 国際分業再編成下の日本農業 [林悠起子]</p> <p>第7章 国家独占資本主義の労働政策(戦後の労働政策) [湯浅良雄]</p> <p>第8章 国家独占資本主義と地域開発 [佐々木雅幸]</p> <p>第9章 対外投資からみた日本資本主義の国際的地位 [柳ヶ瀬孝三]</p> <p>第10章 現代インフレーションの性格(日本経済の現局面をどうみるか) [林堅太郎]</p> <p>第11章 国家独占資本主義と統制経済 [林堅太郎・池上惇]</p> <p>第12章 「資源問題」と日本企業の対外進出 [坂井昭夫]</p> <p>第13章 日本国家独占資本主義の基本的諸特徴(若干の論点整理とイデオロギー批判) [坂井昭夫]</p> <p>展望 日本の政治経済機構の民主主義的改革 [林堅太郎]</p> <p>あとがき</p> <p>※経済学基礎理論研究所編集委員会が企画・編集に参加して、『労働経済旬報』誌連載を骨格として出版</p>
4 1976年7月20日	<p>基礎経済科学研究所・坂井昭夫編『日本の経済危機—1970年代「大不況」の性格と展望』労働経済社</p> <p>序—「不況」の現状と「不況論」の展開 [坂井昭夫]</p> <p>第I部 現下の「不況」の基本的性格</p> <p>第1章 現在の「不況」の特徴と歴史的性格 [小野秀生]</p> <p>第2章 「多国籍企業」の展開と資本主義の構造的危機 [中村雅秀]</p> <p>第3章 「鉄ブラス石油」からの転換 [池上惇]</p> <p>第II部 政府の「不況対策」をめぐって</p> <p>第1章 景気浮揚と経済構造転換の財政政策 [坂井昭夫]</p> <p>第2章 経済危機下における通産政策の動向 [陶山計介・林堅太郎:共筆]</p> <p>第3章 赤字国債の発行と財政・金融の再編成 [二宮厚美]</p> <p>第4章 「ライフサイクル計画」の意味するもの [坂井昭夫・中谷武雄:共筆]</p> <p>第5章 労働政策の現局面と国民生活構造の変化 [坂井昭夫・湯浅良雄:共筆]</p> <p>第6章 地方財政危機と改革の展望 [重森暁]</p> <p>第III部 展望—情勢の特徴と国民の立場に立った危機打開の方向 [林堅太郎]</p> <p>※基礎経済科学研究所(旧名称・経済学基礎理論研究所)の編集部会による研究創造活動の一環で企画・公判、と記載</p> <p>※基礎経済科学研究所の名称での初出本、『労働経済旬報』連載「今次の不況の分析」を再編集・構成</p>
5 1977年4月10日	<p>基礎経済科学研究所年表編集委員会編『資本論・帝国主義論年表』基礎経済科学研究所</p> <p>※基礎研夜間通信研究科の「資本論・帝国主義論講義」の便宜に資するように編集された年表</p>
	<p>シリーズ:島恭彦監修『講座・現代経済学』全6巻</p> <p>※編集委員会代表:池上惇・尾崎芳治・中村哲・野村秀和</p>

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
6 1978年3月1日	<p>※危機的な「経済の時代」に対して、人間の全面的発達への道を科学的に探究しようとする企画</p> <p>島森彦監修『経済学入門』(講座・現代経済学 第1巻)、青木書店</p> <p>序章 労働と生活の経済学 [池上惇]</p> <p>第1章 技術の経済学 [林堅太郎]</p> <p>第2章 資本の経済学 [小野秀生・池上惇]</p> <p>第3章 自治体の経済学 [二宮厚美]</p> <p>第4章 発達の経済学—教育と福祉を中心に— [二宮厚美]</p> <p>第5章 民族問題の経済学 [本多三郎]</p> <p>第6章 軍事の経済学 [坂井昭夫]</p> <p>第7章 人間の全面発達と現代経済学 [池上惇]</p> <p>補論 現代経済学の学習・研究・教育—若干の文献解題をかねて— [池上惇]</p> <p>現代経済用語・参考文献小辞典</p>
7 1978年9月1日	<p>島森彦監修『資本論』と現代経済(1)』(講座・現代経済学 第2巻)、青木書店</p> <p>はじめに [池上惇]</p> <p>序章 現代経済学と『資本論』—工場法と経済学批判— [森岡孝二]</p> <p>第1章 労働日—工場法体制における労働と家族— [湯浅良雄]</p> <p>第2章 協業とマニファクチュア—共同体の解体と再建にむけての胎動— [中谷武雄]</p> <p>第3章 機械と大工業(1)—機械と労働者の発達— [吉田文和]</p> <p>第4章 機械と大工業(2)—社会的分業の発達と工場法— [林堅太郎]</p> <p>第5章 大工業と住民生活 [二宮厚美]</p> <p>補論 大工業と農業 [梅垣邦胤]</p> <p>『資本論』の学習によせて</p>
8 1978年12月20日	<p>島森彦監修『資本論』と現代経済(2)』(講座・現代経済学 第3巻)、青木書店</p> <p>序章 経済学と歴史変革 [森岡孝二]</p> <p>第1章 商品と貨幣—資本主義社会の「経済的細胞形態」— [後藤康夫]</p> <p>第2章 貨幣の資本への転化 [尾崎芳治]</p> <p>第3章 剰余価値の生産 [藤岡惇]</p> <p>第4章 生産的労働と不生産的労働 [重森暁]</p> <p>第5章 労賃 [伍賀一道]</p> <p>第6章 資本の蓄積過程 [角田修一]</p> <p>補論 アイルランド—イギリスにおける資本蓄積とアイルランド人労働者— [本多三郎]</p> <p>第7章 資本主義の本源的蓄積 [尾崎芳治]</p> <p>終章 『資本論』と貧困化論 [成瀬龍夫]</p> <p>まとめにかえて—史的唯物論と経済学・『資本論』第二部、第三部の学習と研究のために— [池上惇]</p> <p>マルクス・エンゲルス年表</p>
9 1979年7月1日	<p>島森彦監修『帝国主義論』と現代経済』(講座・現代経済学 第4巻)、青木書店</p> <p>序章 『帝国主義論』研究の一視点 [坂井昭夫]</p> <p>第1章 生産の集積と独占 [二宮厚美]</p> <p>第2章 銀行の新しい役割と金融資本 [二宮厚美]</p> <p>第3章 資本の輸出 [中村雅秀]</p> <p>第4章 帝国主義と世界分割 [奥田宏司・池上惇]</p> <p>第5章 資本主義の腐朽性と寄生性 [青木圭介]</p> <p>第6章 帝国主義的イデオロギーの諸潮流 [坂井昭夫]</p> <p>第7章 社会主義・共産主義—レーニンのプハーリン批判を中心に— [岩林彪]</p> <p>補論1 インフレーションの国際的展開 [横田綾子]</p> <p>補論2 「多国籍企業」と国家主権 [鶴田廣巳]</p> <p>むすびにかえて—『帝国主義論』の学習を深めるために— [坂井昭夫]</p> <p>レーニン・『帝国主義論』年表</p>
10 1981年4月1日	<p>島森彦監修『現代経済学論争』(講座・現代経済学 第5巻)、青木書店</p> <p>序章 現代経済学論争と現代資本主義研究 [二宮厚美・佐々木雅幸]</p> <p>第1章 日本資本主義論争 [長島修・小野秀生]</p> <p>第2章 帝国主義論争 [坂井昭夫]</p> <p>第3章 金融資本論争—スウィージーの金融資本否定論をめぐる— [森岡孝二]</p> <p>第4章 地域・自治体論争 [田中重博]</p> <p>第5章 技術論争—資源浪費と技術跛行をめぐる— [北条豊]</p> <p>第6章 現代貧困化論争—理論的方法を中心に— [成瀬龍夫]</p> <p>第7章 所有論争と社会主義—平田清明氏の「市民社会論」「自主管理論」を中心に— [芦田文夫]</p> <p>現代経済学論争を深めるために—問題の所在と参考文献— [二宮厚美]</p>
11 1982年4月1日	<p>島森彦監修『現代日本経済論』(講座・現代経済学 第6巻)、青木書店</p> <p>はじめに 現代日本経済分析の方法 [池上惇]</p> <p>序章 日本資本主義の現段階 [野村秀和]</p> <p>第1章 戦後日本資本主義の制度的基盤 [柳ヶ瀬孝三]</p> <p>第2章 日本型金融資本の発展 [小野秀生]</p> <p>第3章 日本資本主義の産業構成 [重森暁]</p> <p>第4章 現代日本資本主義の危機と産業構成 [林堅太郎]</p> <p>第5章 地域開発と資本輸出 [鈴木茂]</p> <p>第6章 現代日本の貧困化と階級構成 [土居英二]</p> <p>第7章 安価な政府と経済民主主義 [加藤一郎]</p> <p>第8章 戦後日本農業における変革主体の形成 [鈴木文薫]</p> <p>終章 戦後日本経済における民主主義的統治力量の発達過程 [池上惇]</p> <p>あとがき [池上惇]</p>
12 1981年6月22日	<p>重森暁編『地域のなかの公務労働』大月書店</p> <p>序 公務労働者によせて [重森暁]</p> <p>第1部 地域住民生活の変化と公務労働</p> <p>第1章 現代の貧困化と公務労働 [重森暁]</p> <p>第2章 社会の協働業務と公務労働—公務労働論争(柴田説・有田説・池上説)の再検討 [小森治夫]</p> <p>第2部 公務労働者の発達と民主的地域づくりの課題</p> <p>第3章 地域経済の展開と公務労働—高知の実態を中心に [太田紘志]</p> <p>第4章 住民要求の発達と公務労働—戦後における京都を舞台に [田畑安敏]</p> <p>第5章 保育労働と総合的地域づくり [今井幸二]</p> <p>第6章 障害児の発達保障と公務労働—大津市でのとりくみから [小沢修司]</p> <p>第7章 土木・建設労働と行政の総合性 [大原政雄]</p> <p>第8章 統計労働と住民の発達保障 [榊真輔]</p> <p>第9章 税務労働と税務行政改革の課題 [松村裕二]</p> <p>第10章 民主的機構改革と労働組合の行政参加 [武元勲]</p> <p>第3部 現代の行政改革と公務労働</p>

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
	第11章 現代の行政改革と官僚機構 [二宮厚美] ※自治体論学科が執筆者の中心に企画・出版、夜間通信研究科の学科による初めての企画・出版
13 1982年12月15日	基礎経済科学研究所編『人間発達の経済学』青木書店 第1章 現代生活と人間発達の経済学 [重森暁] 第2章 経済学の基礎概念と人間の発達 [森岡孝二] 第3章 勤労者相互の競争と全面発達 [池上惇・森岡孝二] 第4章 経済学における人間像—貧困化と発達の弁証法— [二宮厚美] 第5章 現代国家における貧困化と発達 [池上惇] 第6章 人間発達を保障する労働 その過去・現在・未来 [柳ヶ瀬孝三] 第7章 現代民主主義と社会主義—未来社会への展望— [池上惇・森岡孝二] ※1978年『講座・現代経済学』での「人間発達の経済学」とは何かという問いを受け、企画された
14 1985年5月30日	*森岡孝二・林堅太郎・佐々木雅幸編『入門現代の経済社会—日本と世界の明日はどうなる—』昭和堂 第1部 現代世界の富と貧困 第1講 現代経済の支配者—巨大企業 [森岡孝二] 第2講 IMF体制の崩壊と世界経済 [池上惇] 第3講 深刻化する南北問題 [佐々木雅幸] 第4講 石油危機から原子力へ—資源・エネルギー問題— [林堅太郎] 第5講 スタグフレーション—現代の不況と失業— [青木圭介] 第2部 国際化・情報化と日本経済 第6講 日本経済の特質—労働条件の国際比較— [林堅太郎] 第7講 コンピュータ革命と産業用ロボット [青水司] 第8講 日本経済の国際化と経済摩擦 [鶴田廣巳] 第9講 ニューメディアと国民生活 [二宮厚美] 第10講 現代家族とサービス経済化 [小沢修司] 第3部 構造転換と日本社会 第11講 銀行と企業集団 [青木圭介] 第12講 破産に瀕する国家財政 [芦田亘] 第13講 どうかえる現代経済 [柳ヶ瀬孝三] 生涯学習のすすめ [藤岡惇] ※基礎研が企画協力
15 1985年7月15日	成瀬龍夫・小沢修司編『家族の経済学』青木書店 第1章 現代家族の貧困と発達 [小沢修司] 第2章 現代の家計構造と家計管理 [井本正人] 第3章 家族と家事労働 [成瀬龍夫] 第4章 婦人の発達と家族の未来 [横田綾子] 第5章 家族の福祉と人間発達型ライフサイクル [横山寿一] 第6章 家族の発達と社会的民主主義 [二宮厚美] 第7章 家族の再建と経済学の課題 [小沢修司] ※『人間発達の経済学』につづく「発達の経済学」研究の共同成果!と表記
16 1986年9月20日	森岡孝二編『勤労者の日本経済論—構造転換と中小企業』法律文化社 序 [森岡孝二] 第1章 石油危機後の産業再編成—石油化学産業の国際的再編戦略を中心に— [中原優] 第2章 総合商社の経営と労働—「商社・冬の時代」論をめぐって— [宇多真揆世] 第3章 オフィス・オートメーションと事務労働 [西田達昭] 第4章 婦人労働の発達問題 [野崎律子] 第5章 「多様化」時代と中小企業 [安満弁吉] 第6章 新興産業における中小企業と独占 [高田好章] 第7章 工業都市の企業動向と活性化の条件 [山田文明] 第8章 中小業者運動における仕事おこしと地域づくり [永吉秀幸] ※大阪第三学科が企画・出版、夜間通信研究科の学科による二つ目の企画・出版
17 1987年3月1日	基礎経済科学研究所編『労働時間の経済学』青木書店 序章 日本の労働時間 [藤本武] 第1章 労働時間と人間生活 [森岡孝二] 第2章 資本主義の歴史と労働時間—時間短縮と労働運動— [坂本悠一] 第3章 戦後日本の労働基準行政—長時間労働温存の側面— [青木圭介] 第4章 共稼ぎ家族と労働時間の短縮 [佐藤卓利] 第5章 日本の労働時間短縮闘争の問題点と課題—同盟、総評の時短闘争批判— [伍賀一道] 第6章 フランスにおける労働時間問題—1982・86年改革を中心として— [大和田敢太・矢部恒夫] 第7章 西ドイツにおける労働時間短縮運動—1984年ストライキ闘争をめぐって— [小淵港] 第8章 労働時間をめぐる政策動向とその短縮の展望 [湯浅良雄] ※『人間発達の経済学』『家族の経済学』に続き、長時間労働制限と労働時間短縮が緊急の国民的課題との認識で企画
	シリーズ:基礎経済科学研究所編『講座・構造転換』全4巻 ※前シリーズ『講座・現代経済学』での経済理論と日本経済分析に続き、日本経済の構造転換分析を主題とした新講座
18 1987年7月1日	基礎経済科学研究所編『国際化のなかの日本』(講座・構造転換 第1巻)、青木書店 第1章 現代世界のなかの日本経済 [柳ヶ瀬孝三] 第2章 多国籍企業化と産業調整 [小林世治] 第3章 情報化のなかの蓄積構造 [林堅太郎] 第4章 流通業の転換と生活文化戦略 [田井修司・斉藤雅通] 第5章 国際化・情報化と中小企業 [小森治夫] 第6章 国際化のなかの日本農業 [江尻彰] 第7章 国際国家・日本の財政政策 [佐々木雅幸] 第8章 国際化の費用負担と経済自主権 [新岡智] 第9章 構造転換と公共性 [青木圭介]
19 1987年7月5日	基礎経済科学研究所編『変わる労働と生活』(講座・構造転換 第2巻)、青木書店 第1章 日本資本主義の構造転換と国民生活 [湯浅良雄] 第2章 職場生活のパラダイム転換 [成瀬龍夫] 第3章 地域生活と新しい共同性 [松原豊彦] 第4章 家計構造と生活時間の変化 [佐藤卓利] 第5章 情報化と消費生活 [山西万三] 第6章 高齢化と国民生活 [武田宏] 第7章 国際化のなかの国民生活 [横山寿一] 第8章 真のゆたかさを求めて [湯浅良雄・成瀬龍夫]
20 1987年8月1日	基礎経済科学研究所編『人間発達の民主主義』(講座・構造転換 第3巻)、青木書店 第1章 現代民主主義の視点 [重森暁]

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
	第2章 労働の変容と生涯学習権 [宇田綾生・布川日佐史] 第3章 消費の構造転換と生活協同組合 [的場信樹] 第4章 都市構造の転換と地価問題 [川瀬光義] 第5章 現代日本の資本家階級 [森岡孝二] 第6章 「財政再建」路線と税制改革 [梅原英治] 第7章 民族の自立と連帯 [藤岡惇] 第8章 生存の危機と平和のためのネットワーク [芦田亘]
21 1987年9月5日	<b>基礎経済科学研究所編『経済学の新展開』(講座・構造転換 第4巻)、青木書店</b> 第1章 構造転換分析と経済理論 [森岡孝二] 第2章 近代経済学の動向と「ポスト・モダン」 [大西広] 第3章 現代技術と人間労働の理論—オートメーション、コンピュータ、情報革命 [小林正人] 第4章 生活様式の経済理論 [角田修一] 第5章 現代資本主義と株式会社 [佐々木秀太] 第6章 「環境危機」とエコロジー問題の経済理論 [寺西俊一] 第7章 現代社会主義と経済システムの制御 [中西一正]
22 1989年9月30日	<b>基礎経済科学研究所編『ゆとり社会の創造—新資本論入門12講』昭和堂</b> I 労働過程 第1講 いま、『資本論』が面白い [森岡孝二] 第2講 生活者の時間学 [成瀬龍夫] 第3講 資本主義の生産力と協業・分業 [中谷武雄] 第4講 機械の時代を考える [林堅太郎] 第5講 オートメーション、ME革命と労働の未来 [小林正人] II 商品世界と労働市場 第6講 商品・貨幣と人間生活 [角田修一] 第7講 労働力の販売—セールスマンの不安と孤独— [青木圭介] 第8講 資本と剰余価値 [森岡孝二] 第9講 資本蓄積と不安定化する雇用形態 [上掛利博] III 資本主義の歴史的傾向 第10講 資本主義はどこへ行く—「本源的蓄積」章から考える— [藤岡惇] 第11講 古典派経済学・近代経済学と『資本論』 [大西広] 第12講 資本の王国から自由人の協同社会へ [重森暁] ※基礎研「資本論講座」から生まれた本、1978年『講座・現代経済学』第2・3巻を踏襲した分かりやすく新しい資本論入門書
23 1991年3月30日	<b>林堅太郎・大西広・佐中忠司編『新編・現代の経済社会—21世紀へのトレンドを考える—』昭和堂</b> 序章 21世紀を生きる諸君へ [林堅太郎] I 身近な問題を考える 第1章 教育問題を考える [青木圭介] 第2章 税制改革を考える [浅田和史] 第3章 「高齢化社会」を考える [岡崎祐司] 第4章 住宅・土地問題を考える [大西広] II 情報化社会を考える 第5章 技術と労働を考える [市川浩] 第6章 企業経営を考える [佐古井一郎] 第7章 消費生活を考える [佐藤卓利] 第8章 通信産業を考える [佐中忠司] III 国際化・世界化を考える 第9章 現代の日米関係を考える [藤岡惇] 第10章 アジア太平洋経済圏を考える [西口清勝] 第11章 外国人労働者問題を考える [横山寿一] 第12章 ジャパンマネーを考える [向壽一] 第13章 さまよえる現代社会主義を考える [溝端佐登史] 終章 21世紀に向かって [大西広] ※『入門・現代の経済社会』(1985年)の全面改訂版、基礎研で発案・企画
	<b>シリーズ『今日の世界経済と日本』全3巻</b> ※1980年代の日本経済を考察した『講座・構造転換』の姉妹編として、1990年代の日本を主軸においた世界経済論として企画
24 1992年10月1日	<b>関下稔・森岡孝二編『世界秩序とグローバルエコノミー』(今日の世界経済と日本 第1巻)、青木書店</b> 第1章 アメリカの競争力強化策と産業再編戦略—90年代の世界戦略の前提として— [関下稔] 第2章 アメリカの保護主義圧力と国際関係 [新岡智] 第3章 90年代世界経済とEC統合 [村田武] 第4章 グローバル・パートナーシップの中の日米関係 [二宮厚美] 第5章 国際政策協調論批判 [坂井昭夫] 第6章 日本の経営における労働編成とフレキシビリティ [青木圭介]
25 1992年10月20日	<b>奥田宏司編『ドル体制の危機とジャパンマネー』(今日の世界経済と日本 第2巻)、青木書店</b> 第1章 国際通貨ドルの変容—80年代なかば以降の諸相— [横田綾子] 第2章 米経常収支赤字のファイナンスとドル不安 [奥田宏司] 第3章 日本の金融大国化とドル体制 [小西一雄] 第4章 国際金融市場のグローバル化と途上国証券市場 [神沢正典] 第5章 累積債務問題と多国籍銀行 [井上博]
26 1993年9月1日	<b>中村雅秀・林堅太郎編『日本経済の国際化とアジア』(今日の世界経済と日本 第3巻)、青木書店</b> 第1章 産業構造の国際的変貌と多国籍企業 [角田収] 第2章 アジアNIEsの発展と日本 [中村雅秀] 第3章 「労働市場の国際化」と外国人労働問題—アジアと日本を中心に— [伍賀一道] 第4章 資源・エネルギー問題の日本型構造—鉄鋼原料資源問題と木材資源問題を中心に— [十名直喜] 第5章 多国籍アグリビジネスと食糧・農業問題 [江尻彰] 第6章 ODAと「独裁的開発政治体制」 [和田幸子]
27 1992年10月5日	<b>基礎経済科学研究所編『日本型企業社会の構造』労働旬報社</b> 序章 企業社会の扉をひらく [二宮厚美] 第1部 現代資本主義と日本型企業社会の特殊性 第1章 企業社会日本の構造と労働者の生活 [渡辺 治] 第2章 ポスト・フォーディズムと日本資本主義 [伊藤 誠] 第3章 日本型企業社会の構造—「日本型フレキシビリティ」と「前近代性」の構造 [十名直喜] 第2部 企業社会ニッポンを解剖する 第4章 会社本位主義の構造 [奥村 宏] 第5章 日本の経営における働かせ方の論理 [熊沢 誠] 第6章 フォーディズムと日本の生産方式 [成瀬龍夫] 第3部 日本型企業社会における労働・産業・主体形成

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
	第7章 日本型企業社会と労働時間構造の二極化—過労死問題へのアプローチ [森岡孝二] 第8章 日本型産業社会の特徴と改革の課題—系列支配と生存競争の組織化を中心として [池上 惇] 第9章 企業社会からの自立と主体形成の条件 [二宮厚美] ※日本型企業社会の変革に必要な課題の究明への基礎研による共同研究の成果
28 1993年7月20日	<b>*木原正雄・溝端佐登史・大西広編『経済システムの転換—20世紀社会主義の実験—』世界思想社</b> 序章 迷える経済システム [溝端佐登史・大西広] 第I部 二〇世紀社会主義の構造 第一章 計画経済のパフォーマンスとその転換 [溝端佐登史] 第二章 旧ソ連邦工業とその技術的問題点 [市川浩] 第II部 二〇世紀社会主義の史的展開 第一章 社会主義システムの形成 [森岡真史] 第二章 経済改革の挑戦と挫折—ポーランドの諸改革を中心に [田口雅弘] 第三章 社会主義システムの崩壊 [芦田亘・溝端佐登史] 第III部 二〇世紀社会主義の転換 第一章 転換期の経済政策—市場経済化と民営化の現在 [溝端佐登史] 第二章 転換期の軍事政策—ソ連邦の解体とロシアの軍事政策 [木原正雄] 第IV部 二〇世紀社会主義の経済理論 第一章 社会主義システムの理論 [森岡真史] 第二章 社会主義と史的唯物論 [大西広] 第V部 新しい社会主義像の探究 第一章 新しい社会主義像を求めて [森岡孝二] 第二章 協同社会主義の展望 [大野節夫] 第三章 賃貸型社会主義の展望 [田中雄三] 第四章 自由社会主義の展望 [野澤正徳] ※基礎研が企画を援助したと「はしがき」に記載
29 1993年7月20日	<b>基礎経済科学研究所編『戦後経済学を語る—わが青春の経済学』かもがわ出版</b> 第1部 地域・自治体と住民の経済学 島 恭彦 財政学と自治体運動 宮本憲一 公害と地域・自治体の経済学 早川和男 住居の権利 第2部 技術と産業の経済学 中村静治 技術革新と工場・企業 市川弘勝 鉄鋼産業から中小企業研究へ 柴田悦子 海運・港湾研究と婦人問題 第3部 社会調査と経済学の課題 江口英一 貧困問題と社会調査の課題 坂寄俊雄 社会保障と社会調査 藤本 武 労働科学と経済学 第4部 マルクス経済学と近代経済学 置塩信雄 マルクス経済学と近代経済学 川口 弘 近代経済学と体制論 関 恒義 数理経済学と経済民主主義 第5部 思想・哲学・方法論 見田石介 経済法則における普遍と特殊 林 直道 ウェーバー・恐慌論・史的唯物論 杉原四郎 ミル・マルクス・河上肇 浜林正夫 経済史と思想史 第6部 社会運動と歴史の転換 戸木田嘉久 労働運動の発展法則と経済学 黒川俊雄 労働運動と共同組合 木原正雄 社会主義の行く先を見据えて 山口正之 国際化、民営化と国家の死滅 二十氏の主要著作・戦後略年表 ※基礎研創立25周年記念事業として企画、『経済科学通信』上の各氏へのインタビュー連載記事を編集・出版
30 1994年2月10日	<b>森岡孝二編著『現代日本の企業と社会—人権ルールの確立をめざして』法律文化社</b> はしがき [森岡孝二] 第1章 日本型企業社会の仕組みと企業システム [十名直喜] 第2章 崩れゆく終身雇用制と非正規労働者 [高田好章] 第3章 中小企業における生産システムの変容 [小野満] 第4章 NTTにみる民営化後の経営と労働 [西田達昭] 第5章 残業およびサービス残業の実態と構造的誘因 [森岡孝二] 第6章 金融機関における「高生産性内勤体制」 [森井久美子] 第7章 女性の社会的労働参加と企業社会の変革 [池田清] 第8章 日本における外国人労働者の流入過程と労働者派遣法 [仲野(菊地)組子] 第9章 「生活大国」論と土地・住宅問題 [高島嘉巳] ※大阪第三学科が企画・出版
31 1994年2月25日	<b>基礎経済科学研究所編『文化中心社会の条件—日本型企業社会からの自立』労働旬報社</b> 序章 日本型企業社会の転機と文化 [池上 惇] 第I部 企業社会と生活小国 第1章 経済大国の生活小国 一中年よ、からだをきたえておけ— [木津川計] 第2章 企業社会を支える文化的価値意識 一職場の現実から— [中山久雄] 第II部 余暇と労働の時間文化 第3章 余暇の現実と人間発達 [小沢修司] 第4章 企業社会の時間文化と文化活動時間 [森岡孝二] 第III部 「メセナ」への疑問 第5章 企業の文化支援と労働の現実 [須田稔] 第6章 過渡期としてのメセナ [大西広] 終章 文化の権利とインフラストラクチャー [柳ヶ瀬孝三] ※1992年夏の研究大会(奈良・明日香村)でのメインシンポがこの本の企画の発端
32 1994年11月25日	<b>基礎経済科学研究所編『人間発達の政治経済学』青木書店</b> プロローグ 『人間発達の経済学』と本書 [二宮厚美] 第1章 現代社会と人間発達の諸条件 [二宮厚美] 第2章 環境と文化と人間の発達 [成瀬龍夫] 第3章 人間発達と地域 [重森暁] 第4章 企業社会における労働と人格の発達 [青木圭介] 第5章 人間発達のためのインフラストラクチャー [柳ヶ瀬孝三] 第6章 社会システムの変革と民主主義 [森岡孝二]

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
	第7章 社会の進化と固有価値の経済学 [池上惇] ※1982年『人間発達の経済学』の改稿作業の産物、単なる改訂ではなく、すべてを新しく書き改めた
33 1995年9月30日	シリーズ:基礎経済科学研究所編『働く女性と家族のいま』全2巻 ※ジェンダー視点に立った日本型企业社会論の最初の集団的試み 基礎経済科学研究所編『日本型企业社会と女性』(働く女性と家族のいま 1)、青木書店 序章 日本型企业社会における女性の労働と家族 [中川スミ] 第1章 日本的経営と女性労働 [熊沢 誠] 第2章 均等法後の女性雇用の現状 [久米弘子] 第3章 女性労働と賃金体系・価値理論 [下山房雄] 第4章 男女賃金格差と人事考課—「コンパラブル・ワース」論争によせて [黒田兼一] 第5章 企業中心社会を超える [大沢真理] 第6章 企業社会を超越する戦略と女性の位置 [木下武男] 第7章 男女雇用機会均等法の限界—期待した初の調停と調停案への失望 [北川清子] 第8章 職場における男女平等をめざすネットワーク [越堂静子]
34 1995年9月30日	基礎経済科学研究所編『日本型企业社会と家族』(働く女性と家族のいま 2)、青木書店 序章 戦後日本の社会変動と家族 [森岡孝二] 第1章 日本的雇用慣行と家族生活 [本多淳亮] 第2章 日本型企业社会と家族の現在 [木本喜美子] 第3章 日本の労働者の人権と家族 [宮地光子] 第4章 「日本型福祉社会」と家族 [佐藤卓利] 第5章 現代日本の家族政策と共働き家族の福祉 [二宮厚美] 第6章 国際家族年と労働者家族 [伊藤セツ] 補論 アメリカの労働時間と消費生活 [ジュリエット・ショア]
35 1998年4月20日	基礎経済科学研究所編『地球社会の政治経済学』ナカニシヤ出版 序章 世界地図を広げてみよう [大西 広] 第1部 地球をおおう資本主義 第1章 世界経済を支配する多国籍企業 [板木雅彦] 第2章 ヨーロッパ統合の歩みと行方 [芦田亘] 第3章 アジアの成長と変貌—アジア大競争の時代— [和田幸子] 第4章 市場経済化への新しい波—ロシア・東欧の体制転換— [田中 宏] 第2部 世界とともに生きる日本 第5章 世界のなかの日本企業 [十名直喜] 第6章 データで読む日米の景気循環 [石上秀昭] 第7章 外国為替と国際通貨 [奥田宏司] 第8章 世界の農業と食糧 [樫原正澄] 第9章 グローバリゼーションと地球環境問題 [植田和弘] 第3部 21世紀地球社会の市民生活 第10章 世界の労働時間の流れと日本 [森岡孝二] 第11章 経済のグローバル化と女性労働 [中川スミ] 第12章 世界の高齢者福祉 [上掛利博] 第13章 21世紀地球社会とマルチメディア [野口宏] ※「地球社会の政治経済学」で論ずべきテーマを体系的・網羅的に論じた入門書
36 1999年1月20日	基礎経済科学研究所編『新世紀市民社会論—ポスト福祉国家政治への課題』大月書店 I 新世紀市民社会への日本の課題 第1章 「資本主義の自由主義的再編」の時代の市民社会 [神谷章生] 第2章 ポスト福祉国家政治と市民的自立 [山口定] [コラム]大蔵省・日銀接待の経済学的意味 [鶴田廣巳]鶴田廣巳 II 企業活動の市民的監視 第3章 企業活動の市民的監視 [森岡孝二] 第4章 政治資金に対する市民的監視 [醍醐聡] 第5章 従業員—市民による企業自治とその条件 [上田道明] III 新世紀市民社会への世界的課題 第6章 英国における政府の「説明責任」と特殊法人 [小堀真裕] 第7章 ロシア・「民主主義」的な社会への挑戦 [新美治一] 第8章 「開発独裁」の終焉と市民社会形成への条件 [和田幸子] 第9章 民族を超える「市民」の可能性 [大西広] ※『経済科学通信』編集局が『経済科学通信』掲載論文と新規依頼論文とで編集・企画
37 1999年12月15日	*池上惇・森岡孝二編『日本の経済システム』青木書店 はじめに—人権と経済学、そして経済分析 [池上惇] 序章 現代日本社会の政治経済学による分析をめぐって—自立支援型社会改革と日本型産業社会 [池上惇] 第1部 企業と労働 第1章 今日の日本社会と企業システム [森岡孝二] 第2章 日本の生産システムと労働組織 [青木圭介] 第3章 日本の産業・企業システムとパラダイム転換 [十名直樹] 第4章 現代日本社会におけるネットワーク化の進展 [井本正人] 第2部 福祉と地域 第5章 企業社会の再編成と福祉国家の課題 [二宮厚美] 第6章 ナショナル・ミニマムと社会保障改革 [成瀬龍夫] 第7章 金融の自由化と金融機関行動の変貌 [池島正興] 第8章 現代日本の資本と土地所有 [梅垣邦胤] 第3部 国際関係 第9章 世界都市・東京の文化と経済 [佐々木雅幸] 第10章 国際金融システムと金融制御 [紀国正典] 第11章 持続可能な発展と世界経済システム [植田和弘] 終章 現代世界経済における固有性と国際性—文化共存システムの経済学の視点から— [池上惇] あとがき [森岡孝二] ※基礎研活動に参加してきた執筆者で構成、「あとがき」に基礎研運動とその理念が書かれている
38 1999年10月31日	鈴木茂・大西広・井内尚樹編『中小企業とアジア』昭和堂 第1部 中小企業のアジア進出 1 中小企業のアジア進出における問題点と可能性 [鈴木茂・大西広・井内尚樹] 2 アジアとの共生模索する中小企業 [鈴木茂] 3 中国進出企業の成功例と失敗例 [大西広] 4 中国進出日系中小企業に関する数量的分析 [矢野剛・仙田徹志・尹清沫] 第2部 アジア展開下の国内中小企業 1 経済のグローバル化と地域産産業 [岡田知弘] 2 繊維産業にみるアジアと日本の競争と共生 [小野満]

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
	<p>3 中小化学工業の国際化と海外進出—エアゾール産業を中心に— [高田好章]</p> <p>4 「中小企業論」における「東アジア化」の位置づけ [芳野俊郎]</p> <p>第3部 新しいアジアの国際分業</p> <p>1 「新しいアジアの国際分業の展開」によせる試論—東南アジアの中小企業への一視角— [和田幸子]</p> <p>2 インドソフトウェア産業と新国際分業 [泉谷晃]</p> <p>3 中国中小企業の発展と国際分業—郷鎮企業の場合— [童適平]</p> <p>終章 アジア工業化の条件と展望 [大西広]</p> <p>※1997年3月春季研究交流集会のシンポジウムを契機に基礎研所員が中心となって企画・出版</p>
39 2003年3月10日	<p>大阪第三学科『変化のなかの企業と社会—労働者の経済学を求めて—』(大阪第三学科開講25周年記念)</p> <p>発行: 基礎経済科学研究所自由大学院大阪第三学科(金融・流通・協同組合論ゼミ)</p> <p>大阪第三学科開講25周年を記念して [森岡孝二]</p> <p>アメリカのリビング・ウェイ運動 [仲野(菊地)組子]</p> <p>経済システムの変化と国際金融市場 [三谷進]</p> <p>グローバルゼーションについて [高橋邦太郎]</p> <p>A. センの潜在能力の平等論—福祉と自由を求めて— [川口民記]</p> <p>資本化する科学技術の分離可能性—生存可能な生態系・経済・社会のために— [森井久美子]</p> <p>地域に立脚した中小企業を求めて—中小企業と地域を結ぶ視点として— [小野 満]</p> <p>土地価格(変動)論への基本視点 [高島嘉巳]</p> <p>化粧品受託製造業と人材派遣—アウトソーシングされる資本と労働— [高田好章]</p> <p>多数のための公共社会実現への提案 [石井孝]</p> <p>思い出の記:小野満・水島多喜男・西田達昭・永吉秀幸・上田均・中村雅秀・掛章孝</p> <p>資料:ゼミ・合宿開催年表、修了論文一覧、参加者名簿等</p> <p>※大阪第三学科開講25周年を記念して、大阪第三学科が企画・出版</p>
40 2005年7月25日	<p>*池上惇・二宮厚美編『人間発達と公共性の経済学』桜井書店</p> <p>はじめに:人間発達の経済学の生誕と現在—歩んできた道と先覚者たちを回想しながら— [池上惇]</p> <p>序章 人間発達と固有価値の経済学 [池上惇]</p> <p>第1章 人間発達を支援する社会システムの経済思想 [柳ヶ瀬孝三]</p> <p>第2章 現代の労働と福祉文化の発達 [青木圭介]</p> <p>第3章 CSR時代の株主運動と企業改革 [森岡孝二]</p> <p>第4章 人間発達と公務労働 [重森暁]</p> <p>第5章 現代の国民生活とナショナル・ミニマムの意義 [成瀬龍夫・二宮厚美]</p> <p>第6章 持続可能な発展と環境制御システム [植田和弘]</p> <p>第7章 ディープ・ピース—平和の担い手を育む社会経済システムの探求— [藤岡惇]</p> <p>終章 現代国家の公共性と人間発達 [二宮厚美]</p> <p>あとがき [二宮厚美]</p> <p>執筆者から読者へ (※研究会での各執筆者の写真とコメント)</p> <p>※「発達の経済学」1982年本、1994年本に続く、「発達の経済学」第三バージョンとして編者が企画・出版</p>
41 2006年10月30日	<p>人間発達ゼミ『市民が創る経済学』をめざして』(人間発達ゼミ30周年記念論集 1)</p> <p>発行: 基礎経済科学研究所人間発達ゼミ</p> <p>「人間発達ゼミ」30周年記念論集の発刊を祝す [藤岡惇]</p> <p>「人間発達ゼミ」その30年を振り返って—勤労者の大地に根ざすことで歴史の暴風に耐ええた歳月の教訓 [藤岡惇]</p> <p>グラムシの市民社会論と「大衆社会」—後藤道夫氏の所説によせて [松田和男]</p> <p>人間発達ゼミで学んだもの—いくつかの「環境」思想 [松田文雄]</p> <p>市民の主体形成をどう導くのか—L.マンフィード『都市の文化』にふれて— [北川健次]</p> <p>人間らしく生きることと文化ホール—指定管理者制度がもたらすもの— [田中幸世]</p> <p>住民の安全の公共性と公共事業 [服部寿子]</p> <p>ファイナンシャル入門 [吉山保]</p> <p>認知症高齢者介護「グループホーム」への道程と課題 [保田和一]</p> <p>「人間発達」についての学習メモ [吉田省二]</p> <p>自治体構造改革に対峙する人間発達の道 [十川泰成]</p> <p>※人間発達ゼミ30周年を記念して、人間発達ゼミが企画・出版</p>
42 2007年9月28日	<p>森岡孝二編『格差社会の構造 グローバル資本主義の断層』桜井書店</p> <p>はしがき [森岡孝二]</p> <p>序章 こうして拡大した格差と貧困 [森岡孝二]</p> <p>第一章 新しい働きすぎとホワイトカラー・エグゼンプション [森岡孝二]</p> <p>第二章 雇用の外部化と製造業における派遣・請負 [高田好章]</p> <p>第三章 アメリカのスタッフィング・サービス産業と労働市場改革 [仲野(菊地)組子]</p> <p>第四章 ディーセントワークと日本の労働基準 [高橋邦太郎]</p> <p>第五章 家計の資産格差と生活格差 [高島嘉巳]</p> <p>第六章 日本経団連の税制提言と格差問題 [大辺誠一]</p> <p>第七章 繊維産業のグローバル化とユニクロ経営 [小野 満]</p> <p>第八章 バイオテクノロジーと多国籍種苗企業 [森井久美子]</p> <p>※大阪第三学科が企画・出版</p>
43 2008年6月30日	<p>中村浩爾編『アダム・スミス『法学講義Aノート』を読む』基礎経済科学研究所自由大学院・社会思想史ゼミ</p> <p>発行: 基礎経済科学研究所自由大学院</p> <p>I スミスの現代的意義</p> <p>[1]アダム・スミスの法学講義 覚書 [中谷武雄]</p> <p>[2]「法学講義Aノート」をめぐる [中村浩爾]</p> <p>II 『法学講義Aノート』抄訳</p> <p>[1]編者による序文(要約) [訳:田中幸世・服部寿子]</p> <p>[2]「法学講義Aノート」(私法編・所有篇) 試訳 [訳:北川健次・服部寿子・田中幸世・横瀬速人・荒木一彰・田中百合子]</p> <p>付録:[1]イギリス地図 [2]コラム [3]A・スミスの時代とその前後年表 [4]社会思想史ゼミ発足の頃</p> <p>※社会思想史ゼミが企画・出版</p>
44 2008年12月25日	<p>基礎経済科学研究所編『時代はまるで資本論—貧困と発達を問う全10講』昭和堂</p> <p>第1講 悪化する労働環境と『資本論』的現実 [森岡孝二]</p> <p>第2講 労働時間と過労死 [小森治夫]</p> <p>第3講 産業革命と情報通信技術革命 [野口宏]</p> <p>第4講 商品・貨幣と消費社会 [山西万三]</p> <p>第5講 労働力の再生産と家族の貧困・発達 [小沢修司]</p> <p>第6講 生産システムの展開と剰余価値の生産 [青木圭介]</p> <p>第7講 非正規雇用の増大とワーキングプア [伍賀一 道]</p> <p>第8講 世界史におけるグローバルゼーション [和田幸子]</p> <p>第9講 人間発達の経済学としての『資本論』 [十名直喜]</p> <p>第10講 人間の発達と未来社会 [大西広]</p> <p>※創立40周年を迎え、1989年『ゆとり社会の創造—新資本論入門12講』の全面改訂版として企画</p>

発行・刊行年月日	編者・書名・出版社: 各章[執筆者]
45 2010年9月21日	<p>基礎経済科学研究所編『未来社会を展望する 甦るマルクス』大月書店</p> <p>第I部 未来社会と人間発達</p> <p>第1章 アソーシエイトした諸個人の生成と発達 [大谷慎之介]</p> <p>第2章 未来社会の条件としての普遍的人間の形成 [松尾匡]</p> <p>第3章 世界市場のなかでの人間の発達 [神山義治]</p> <p>第II部 未来社会と非営利共同セクター</p> <p>第4章 マルクスと生産協同組合 [小松善雄・増田和夫・荒木一彰]</p> <p>第5章 未来社会と人間発達のための民間非営利組織 [富沢賢治]</p> <p>第6章 企業形態論からみた協同組合と株式会社—社会制度の進化についての一考察 [的場信樹]</p> <p>第7章 中国における自主連合労働経済制度の実験 [李炳炎]</p> <p>第III部 未来社会と株式会社</p> <p>第8章 マルクス株式会社論における人格性の陶冶 [有井行夫]</p> <p>第9章 市場をつつじた社会主義と「株式会社」の役割 [芦田文夫]</p> <p>第10章 未来社会論における株式会社の現状と可能性 [高田好章]</p> <p>第11章 「能力に応じて働く」原理実現のための「共産主義的人間」の問題について [大西広]</p> <p>※基礎研「40周年記念出版事業」のひとつとして研究大会・春季集会での報告・討議を経た成果</p>
46 2011年3月1日	<p>基礎経済科学研究所編『世界経済危機とマルクス経済学』大月書店</p> <p>第I部 世界経済危機はなぜ起こり、どう続いているのか</p> <p>第1章 現代の恐慌の特徴を考える—通貨制度の変遷を軸として [松本朗]</p> <p>第2章 2008年アメリカのバブル経済循環の崩壊 [中本悟]</p> <p>第3章 国際的過剰貨幣資本と世界金融経済危機 [徳永潤二]</p> <p>第4章 国際金融危機における過剰な貨幣資本蓄積の原理的考察—擬制資本運動と国際通貨国特権との関連で [吉田真広]</p> <p>第5章 金融危機から経済危機へ—日・米・アジア貿易の経路による波及 [秋山誠一]</p> <p>第II部 マルクス経済学の優位性—近代経済学との対峙</p> <p>第6章 『資本論』と『帝国主義論』で解決済みの今次経済危機 [大西広]</p> <p>第7章 経済危機をめぐる欧米マルクス派—近代経済学批判から政治経済学の深化へ [塚本恭章]</p> <p>第8章 危機を招いた近代経済学とは何か—批判の対象と方法 [伊藤国彦]</p> <p>第9章 21世紀型危機からネット新世界への主体・歴史・理論—資本主義の「解体と止揚」の始まり [後藤康夫]</p> <p>第III部 金融投機化と蓄積至上主義への対案</p> <p>第10章 金融の投機化と金融規制・金融危機管理 [米田貢]</p> <p>第11章 社会的責任金融・国際的責任金融と金融ユニバーサルデザイン—『資本論』から探る金融の公共性 [紀国正典]</p> <p>第12章 過剰資本を解消する道(1):定常・発展型経済へ [北野正一]</p> <p>第13章 過剰資本を解消する道(2):大幅一斉賃上げ策について [北野正一]</p> <p>第14章 雇用崩壊と経済再生の道 [森岡孝二]</p> <p>※「地球と日本の将来に道筋をつけてゆく科学」への挑戦としての基礎研の研究プロジェクトの成果</p>
47 2012年1月31日	<p>中村 浩爾・基礎経済科学研究所編『アダム・スミス』法学講義Aノート』Police編を読む』文理閣</p> <p>I スミス論</p> <p>アダム・スミス『法学講義』行政論の主題と構成 [新村聡]</p> <p>アダム・スミスと三姉妹芸術 [中谷武雄]</p> <p>公平な観察者をめぐって—A・スミスとJ・ロールズ、そしてA・セン— [中村浩爾]</p> <p>II A・スミス『法学講義Aノート』Police編</p> <p>訳:北川健次・服部寿子・田中幸世・荒木一彰・田中百合子</p> <p>※社会思想史ゼミが企画・出版、基礎研より出版助成</p>
48 2012年4月5日	<p>森岡孝二編『貧困社会ニッポンの断層』桜井書店</p> <p>はしがき [森岡孝二]</p> <p>第1章 企業社会の行き着いた果てに—貧困社会ニッポンの出現 [森岡孝二]</p> <p>第2章 人材派遣業の膨張・収縮と経営実態—近年の製造派遣を中心に [高田好章]</p> <p>第3章 パートタイム労働と女性雇用 [中野裕史]</p> <p>第4章 法人実効税率引き下げ論の虚構と現実 [大辺誠一]</p> <p>第5章 グローバル化と中小企業における雇用破壊 [小野 満]</p> <p>第6章 持家社会の居住貧困と住宅ローン問題 [高島嘉巳]</p> <p>第7章 生活保護制度の現状とナショナルミニマム [川口民記]</p> <p>第8章 労働CSRと格差・貧困 [高橋邦太郎]</p> <p>※大阪第三学科が企画・出版、基礎研より出版助成</p>
49 2012年12月25日	<p>和田幸子編著『変貌するアジアと日本の選択—グローバル化経済のうねりを越えて—』昭和堂</p> <p>序章 地球社会の今をとらえる [和田幸子]</p> <p>第I部 アジア経済と日本</p> <p>第1章 東アジア繊維貿易の変遷と日本復権への試み [小野満]</p> <p>第2章 激化する鉄鋼業のグローバル競争—新日本製鐵と住友金属工業の合併計画の背景 [東愛子]</p> <p>第3章 アジアにおける情報通信産業の急拡大と日本のIT技術労働者の今 [三浦誠弘]</p> <p>第4章 インド共和国のダイヤモンド産業—その発展と日本市場 [和田郁子]</p> <p>第II部 アジアにおける日本の国際協力</p> <p>第5章 自然災害にかかわる日本の国際協力の問題点—インドネシアの巨大津波災害を事例に— [阪本将英]</p> <p>第6章 一村一品運動は東ティモールに定着するのか?—日本型地域振興モデルの可能性 [石崎程有之]</p> <p>第7章 グリーパー化に揺れる国民国家の統治構造—トルコ共和国における地方自治制度の事例から— [山口整]</p> <p>第8章 再生可能エネルギー利用の拡大と日本企業の国際協力—東南アジアの事例で— [和田幸子]</p> <p>※東南アジア経済社会論ゼミが企画・出版、基礎研より出版助成</p>
50 2014年3月11日	<p>後藤宣代・広原盛明・森岡孝二・池田清・中谷武雄・藤岡惇『カタストロフィーの経済思想—震災・原発・フクシマ—』昭和堂</p> <p>第I部 「三・一一」フクシマが突きつけるもの</p> <p>第1章 「三・一一」フクシマの人類史的的位置—住民の声と行動を通して考える— [後藤宣代]</p> <p>第2章 災害カタストロフィーの復興理論—カトリナ、チェルノブイリ、フクシマの比較分析を通して— [広原盛明]</p> <p>第II部 カタストロフィーと学問の役割</p> <p>第3章 原発暴走を評した政治経済システム [森岡孝二]</p> <p>第4章 カタストロフィーから憲法による復興へ—「人間復興」と「持続可能な生活」のために— [池田清]</p> <p>第5章 「新しい知」のあり方を探る—経済学研究の観点から— [中谷武雄]</p> <p>第III部 未来への選択</p> <p>終章 軍事攻撃されると原発はどうなるか—「国内外で戦争ができる国」づくりとフクシマの行方— [藤岡惇]</p> <p>あとがき 執筆者一同(中谷武雄)</p> <p>※2013年3月16・17日、福島での基礎研春季研究交流集会での報告をもとに企画・出版</p>

※書名に「\*」印の本は、直接的に基礎研企画ではない(※に理由記載)

作成 創立50周年記念事業実行委員会・担当:高田好